『財界』 2014年 12月2日号

俳句は命のリズム

橋本 世紀男
はしもと・せきお
[橋本経営研究所代表]

人気映画シリーズ『男はつらいよ』のフーテンの寅さんこと、渥美清が俳句を趣味としていたことを知らされたときは驚きました。俳号は「風天」。

※お遍路が一列に行く虹の中

俳優・渥美清は1996年8月に転移性肺がんのため68歳で亡くなりましたが、この句は死の2年前の作。人知れずがんと闘っていた晩年、忍び寄る死を予感していたのかもしれません。

※好きだからつよくぶつけた雪合戦　風天

私は6年ほど前、67歳のとき、誘われて月1回の俳句会に参加することにしました。晩学もいいところですので、俳句の結社には入らず、自己流で俳句を詠み始めました。生意気にも、結社に入って特定の先生の色に染まるよりも、自分の感性、直感を大事にしたいと思ったのです。

1年経って俳句専門誌や俳句大会への投句を始めました。

※流鏑馬や羽生名人の駒捌き

初投句で月刊誌『俳句』(角川学芸出版)の佳作に選ばれ、やる気が出てきました(将棋の駒と馬を掛けてみました)。

※シベリアの兄愛用の防寒帽

翌年にこの句が『俳句』の佳作に選ばれ、兄に知らせたところ、85歳の兄が自分も俳句を始めたいと言い出し、驚くと同時に大変嬉しく思いました。

兄は余程つらい体験をしたのか、抑留の話は一切誰にもしませんでしたが、この句がきっかけで私に少し話してくれました。

兄は騎兵小隊長で幹部候補だったため、シベリアではなくモスクワ郊外に抑留されていたとのこと。私は日本兵は皆シベリアに抑留されていたものと思い込んでいました。

モスクワ郊外から舞鶴経由ではるばる南九州の実家にたどり着いたとき、持ち物は軍用毛布と防寒帽くらいでした。兄は腹部に弾痕があり、傷痍軍人でもありました。

※シベリアの兄の弾痕鳥帰る

この句も『俳句』の佳作に選ばれました。国民皆が戦争に翻弄された時代を生き抜いた兄は2014年10月、91歳の誕生日の直前に永眠しました。

※防寒帽胸に抱かせ棺閉づ

俳句に取り組み始めてから身の周りの景色が今までと違って見えるようになりました。気付かなかった草花や木々の美しさを発見し、蝶や蟻はもちろんのこと、雑草も含めて生きとし生けるものすべてに優しいまなざしを注ぐようになりました。

※蛍飛ぶ恋の音符を紡ぎつつ

この句は『ジパング倶楽部』俳句欄のトップに掲載され、友人、知人の反響大でした。私のペンネームは「青山天水」で俳号は「天水」ですが、知名度が低いので本名で投句した方が反響が直に伝わってきます。

※水の星水の里なりみずすまし

この句は『夏目漱石顕彰草枕国際俳句大会』(熊本市)で、「日本航空賞」に入賞しました。

※黒猫になりて抱かれし春の夢

竹久夢二の代表的な美人画『黒船屋』をイメージして詠みましたが、「夢二俳句大賞」の秀逸に選ばれました。

※除夜の鐘喜怒哀楽の響きかな

この句は喜怒哀楽書房『喜怒哀楽』の読者投票第1位でした。

最近俳句や川柳の人気が高まっています。俳句を教える小学校も増え、NHK学園の俳句講座で学んだ人は52万人を超えるそうです。読者には俳句に造詣の深い方が多いと思われますが、これから初めてみようかなと思われる方は俳句の決まりごとなど気にしないで詠んでみてください。

何の趣味でも楽しくなければ長続きしません。自己流俳句を楽しみつつ興味が湧いてきたら、少しずつ前に進めば良いのではないかと思います。